

都市を造園する

江藤 淳*

昨年の9月中旬、私はニューヨークのジャパン・ソサエティの招きを受けて、ソサエティの新しい“ホーム”となるジャパン・ハウスの開館を記念する講演をおこなうために、訪米する機会をあたえられた。

常陸宮御夫妻をお迎えしておこなわれたこの開館記念週間のあいだには、いろいろ華やかな行事があいついだ、なかでも私が特に印象にとどめているのは、牛場駐米大使の演説の一節である。それは、いうまでもなく英語の演説であったけれども、そのなかで大使は

“Once we were gardens. We want to be gardens again”

といったのである。これを意識すれば

「かつてわが国は庭園のように美しい国でした。私たちは、もう一度そういう国に戻りたいのです」

とでもいうことになるであろう。この言葉は、特に強調していわれたわけではなかったが、不思議に私の心に刻みつけられた。それはあたかも、なにかの鍵に触れる言葉であるようにすら思われた。

それというのもこの“庭園”という言葉が、私に日本文化を成立させ、持続させて来た農耕的な過去を思い出させたからにちがいない。日本の文化とは、これを端的にいうならば、水稲作 (wet rice culture) の文化である。さらにいえば、それは、太陽と水という二つの要素を、不可欠の要素とする農耕社会の文化である。このことは、すでに『古事記』の神話に反映されている。『古事記』編纂の事業そのものが、太陽と水の神話を共有し、水稲作の文化を共有する諸部族の統合を意図したものであったことは、古代史家のあいだによく知られた事実である。

したがって、ごく素朴に言えば、太陽と水の供給が保証され、水稲作がつづけておこなわれているかぎり、日本の文化の有機的持続性は維持され、日本人は日本人でありつづけることができる、ということになる。文化の有機的持続性とはなにかといえば、それは過去の伝統を未来に新しく生かしてゆく能力とでもいうべきものである。もしこの能力がなくなるか、奪われるかしてしまえば、文化は確実に亡びるのである。

そのような能力を失って、すでに亡びてしまった民族

としては、たとえばアメリカ・インディアンがいる。あらゆるインディアンの部族のうちで、もっとも剽悍といわれたサウス・ダコタのスー族にとって、文化の根源は野牛であった。狩猟によって獲られた野牛は、単に食糧となる肉と衣料となる皮革を提供しただけではなく、袋やボートの素材、弓の弦、縫糸、コップやさじ、薬や装飾品までも提供した。その糞までもが燃料として用いられ、部落の寄り合いや祭、儀式や踊り、神話から子供の遊びにいたる一切が、野牛を中心に回転していた。

したがって、野牛の亡びるときはとりもなおさずスー族の文化の亡びるときであった。そして野牛は、主として白人開拓者の乱獲によって、またたく間に亡び去り、それとともにスー族は過去の伝統を新しく生かす道を奪われたのである。彼らは牧畜に転向し、カウ・ボーイとなって生きのびようとしたが、彼らの保護区は牧草の生育に適さず、しかも近くに白人経営の牧場があったために、政府の助成を得ることもできなかった。

こうして、かつて誇り高かったスー族は、今日ではその伝統を未来に生かす手がかりをまったく見失い、アメリカ社会になんら貢献することができぬまま、細々とかたじけなく残存している。いったん伝統を切断されてしまった彼らの子供たちは、手厚い近代的教育を受けてもそれを受容・消化する能力を示さないという。おそらくわれわれ人類は、かつてその伝統のなかに存在したことがないことがらを、新たに学習することはできないのかも知れない。

スー族にとっての野牛は、われわれ日本人にとっての水稲作であり、太陽であり、また水である。この伝統は、今日でも依然としてさまざまなかたちでわれわれの生活のなかに生きている。日本の農夫が依然として米をつくり、われわれが量は前ほどではないにせよ米の飯を食べ、酒を飲んでいることはいうまでもない。芸者は正月の髪に稲穂をさし、力士は土俵の上で「天下泰平・五穀豊穰」を祈りながら四股を踏む。NHKの「ふるさとの歌まつり」に出てくるほとんどすべての芸能は、農耕儀礼に起源を有するものである。

このように、日本の文化は、一面においてはきわめて強靱な有機的持続性を維持している、ということができるかも知れない。つまり、われわれは、近い将来スー族

* 東京工業大学助教授 社会学・文芸評論

のように亡びることはないと思ってもいいのかも知れない。

しかしながら、ふりかえって別の面を見ると、現在この有機的持続性を切断しようという動きが、いくつかあらわれはじめていることは、否定できない事実である。たとえば、一昨年度、昨年度の2年間にわたって、政府は有史以来はじめて米の減産・減反を国策として採用した。経済合理性の見地からいえば、これは米のとれすぎを防ぎ、財政の硬直化を抑えるという意味で合理的な政策だといえないこともない。しかし、調査や講演のために地方の米作地帯に出張するたびに、私は荒れ果てた休耕田を前にして、複雑な感慨にとらわれざるを得ない。

「これは、果して野牛がいなくなるサインではないだろうか」という、不吉な予兆を感ずるわけにはいかないのである。

さらにこの裏側には、過去十数年間、ことに最近数年間における急速な都市化の進捗という現象がある。つまり、農村で米の減産がはじまったのと軌を一にして、都市では太陽と水がともに急激に減少しつつある。いうまでもなくスモッグの発生、高層建造物の増加、および緑と堀割の消滅がそれである。このなかで、私は特に緑と堀割の消滅という現象に注目したい。そこにこそ、今後の土木工学者の叡智を生かすべき方向があると思えるからである。

緑と堀割とはなにかといえば、それはおそらく都市がその空間に含む、水の定量とでもいうべきものと思われる。樹木の成分は、そのほとんどが水であるから、緑とはいわば固形化され、立体的に空間に投射された水だといえることができる。堀割が多くの場合水をたたえていることはいうまでもない。私見によれば、都市に必要な水を飲料水と工業用水、それに下水とだけに限定するのは正確ではない。これは都市が都市であるための必要条件の一つにすぎず、都市が人間的空間になりうるための充分条件をみだしていない。都市が人間的空間であるためには、その景観そのもののなかに一定量の水が含まれていなければならないが、その水が日に日に消滅しつつあるというのが、たとえば東京の現状であることは、いまさら指摘するまでもない。

個人的な経験をここに記せば、1962年の春、私がアメリカ留学に出発する少し前には、築地の新橋演舞場の下、東急国際ホテルの前の堀割には、汚い水ではあるがまだ水がはいていた。しかし、1964年の秋に、2年間の留学を終えて帰国したときには、それはすでに高速度道路にかわっていた。実際私は、その高速度道路を通過して帰宅したのである。このとき以来、いたるところで堀割は水をぬかれ、他の用途に転用され、その結果、都市の景観に占める水の量は激減した。

一方、緑のほうはどうかというと、これもまた劣らずに激減しつつあるように見える。私は現在、市ヶ谷の坂上のマンションに住んでいるが、7年前にはここから見たすと麹町・九段の方角には、まだずいぶん緑がのこっていた。個人の邸宅の庭の植木が、そのまま保存されていたためである。しかし、ここ一、二年のあいだに、これらの邸宅はほとんどとりこわれ、植木はことごとく抜き去られ、そのあとにはビルやマンションが建った。そして、ビルやマンションの周囲にはもはや一本の樹木もなく、私の部屋から見える景観は文字通り灰色の乾いた空間に変質した。

この“乾いた”という修飾語は、単なる気分的かつ恣意的な修飾語ではない。それはかつて存在した水がなくなったために“乾いて”見えるのであり、なくなった水の量は、もしそうしようと思えば、ほぼ正確に計量できるはずだからである。東京は人がふえ、自動車がふえ、なんとなくガサガサしているから“乾いて”見えるのではない。かつて存在した水が今はなくなってしまったからカサカサして見えるのである。

一般に人間は、どの程度の水を、つまり緑と堀割と河川とを、その都市空間のなかに所有するとき、うるおいのある生活を送っていると感ずることができるのか、私はいまここで正確に示すことはできない。しかし、それはおそらく必要不可欠なものであり、都市空間に含まれる水の総量が一定量を割ったときには、その空間は住むに耐えぬ空間に変質するはずだと思われる。そしてこの定量は、日本人の場合おそらく他の諸国民の場合より、当然多くてしかるべきだと考えられる。

いうまでもなくこの理由は、水が日本の文化にとってもっとも根源的な価値の象徴だからである。緑にしろ水にしろ、かなり多量の水を含まない空間を、日本人は“自分の空間”と感ずることができない。“自分の空間”でなければそれは異質な空間であり、それに対して愛情を持つことはおろか、関心を持つことすらできなくなるのが理の当然である。そしてこの Apathy の度合は、生れながらの都市生活者よりは、農村から都市への移住者においてより高いものと推測される。

ここで私は、現在の都市化のもう一つの側面に注目しないわけにはいかない。それは最近十数年間における、農村部から都市部へのおびただしい人口流入という現象である。たとえば1955年には、人口5万以上の都市の住民は、日本の総人口の45.5パーセントであったが、1965年までの10年間に、この比率は58.2パーセントに上昇した。これは年率1.27パーセントの上昇である。この分で行くと、1975年までに、都市生活者は総人口の70.9パーセントに達することになり、実に20年間に3700万人以上の人口が農村から都市に移動するこ

となる。これはほぼ、明治初年の日本の総人口にひとしい数である。

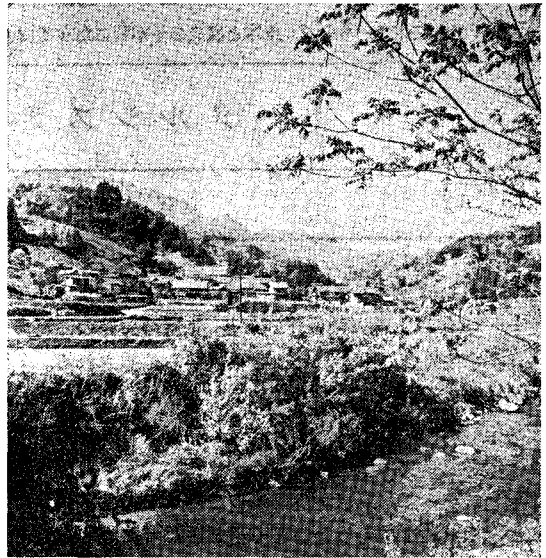
この大移住は、事実上東京と大阪を中心とするいわゆる東海道メガロポリスを目ざしている。これらの新しい移住者たちは、当然さまざまな面で都市生活の困難に直面するはずであるが、そのもっとも深刻なものひとつとして、前述の心理的困難があるものと推測される。すなわち緑と水に乏しい今日の大都市空間を、到底“自分の空間”と感じられないという集団的 Apathy の発生である。

彼らが、いわば野牛を奪われたスー・インディアンに似た状況に追いこまれていることは、疑う余地がない。もちろん日本の新しい都市居住者たちには、盆暮に帰省するという“ふるさと”の確認が可能である。また、彼らは強力な異民族に包囲されている少数民族ではなくて、ホモジニアスな日本人の仲間である。しかし、それにもかかわらず、今日の都市化の速度があまりに急速であり、大都市の“乾き”かたがあまりにはなほだしいために、彼らは知らぬ間にきわめて危険な場所に追いこまれている。それと同時に、そういう都市生活者が7割になんなんとしている日本人全体もまた、きわめて危険な場所に追いこまれつつある。いったい総人口の7割が自分の住む場所を“自分の空間”と感じられずにいるような民族が、国家的・文化的統一を維持することが可能であろうか？

ここにおいて、私は土木工学者のすぐれた叡智にうったえたいと思う。かつてわれわれの祖父は、すぐれた造園の伝統を遺してくれた。日本庭園が造園芸術の粋であることは、いまさらとりたてていうまでもない事実である。それなら、この伝統を新しく現代に生かして、都市そのものを造園することは不可能であろうか？ ビルを石灯籠に見たて、ビルの集団を庭石に見たてて、たとえば東京全体を造園することはできないであろうか？

これは、具体的にいうなら、心理的な要素を含む都市計画のマスター・プランをつくることであり、さらにいえば一定量の水をかならず含む都市空間を設計することである。その結果、たとえば東京は再緑化されることとなり、その河川は当然浄化されることになり、もし可能なら場所によっては新たに堀割をうがち、噴水をつくって、清流を人工的に作り出すことになる。そういう構想は、いったいただの夢物語であろうか？

私はこのことを、単なる思いつきや個人的な趣味でいうのではない。もし日本の大都市が3700万人にのぼる農村出身者をむかえ入れようとしているなら、どうしても都市のなかに農村との共通項をつくり出さなければならない。そうしなければ、日本文化の有機的持続性が徐々に破壊され、深刻な社会不安が起こることが予測され



戸隠(長野県)の農村村景

るからいのである。

もちろんこのためには、莫大な投資が必要である。しかし、冷静に現状を顧みれば、1972年という年はあるいは都市計画、あるいは国土開発の発想を転換させる好機になるかも知れない。例のニクソン・ショック以後、日本経済そのものが輸出主導型の経済からの転換を迫られているからである。

しかし、もし仮りに、日本経済が輸出主導型から国内開発型にうまく転換させられたとしても、その開発の内容が、新幹線網と高速道路の建設だけに限定されるとすれば、あまり稔り多いものになるとは思われない。新幹線や道路は、もちろんつくらなければならない。住宅ももちろん、つくらなければならないが、山を崩したあとには木を植えなければならないし、建設会社はすべからず植木屋を兼業すべきであろう。そしてさらに、東京や大阪のような大都市においては、高速道路や地下鉄を建設するのに要した以上の努力をかたむけて、“造園”の事業が推進されなければならない。

これは実は、日本の国際的地位をたかめ、“エコノミック・アニマル”の汚名を返上するためにも必要なことである。今日、欧米諸国から、新しいソシアル・ダンピング論とでもいうべきものがたかまりつつあるのは憂慮に耐えないが、このような誤解をとき、日本人と日本の産業に対する評価をたかめる上でも、われわれが生活環境改善に本腰を入れて着手したことを、一目瞭然のかたちで全世界に知らせる必要があると思われる。

“Once we were gardens. We want to be gardens again.”

という牛場駐米大使の言葉は、おそらくそのような願いをもこめた言葉だったのである。